

国際誌に掲載する方法

印南 洋
豊橋技術科学大学

キーワード: 国際誌、投稿、掲載、コツ

1. 国際誌に掲載する利点

国際誌に載った論文は、研究に興味のある人ならば誰でも読んだことがあるでしょう。しかし、自分では国際誌に載るような論文が書けるはずがないと思っている人もいます。確かに、国際誌に論文を投稿するのは、国内誌に投稿するよりも難しく、時間もかかります。しかし、それ以上に利点も多いのです。

では、国際誌に論文に掲載する利点は何でしょうか？私は幸いなことに、今まで 5 誌 (*International Journal of Testing, Language Assessment Quarterly, Language Testing, System, TESOL Quarterly*) に掲載していただきました。その経験に基づき、国際誌に掲載する利点は少なくとも 3 点あるように考えています。第 1 に、当該分野の研究者の目に触れる機会が圧倒的に増えることです。その結果、論文を読んでもらうこと、引用してもらう機会が増え、同じテーマに興味がある知人が増えます。類似したテーマの論文や本の査読を依頼されることもあります。主要な国際誌であれば、掲載論文は ERIC などのデータベースに収録されます。収録された論文はお互いに引用されることも多いため、収録対象となる意義は非常に大きいです。

第 2 に、出版社名などから、他分野の研究者にも研究の質の高さをある程度認識してもらえることです。大学教員の人事では、研究業績の審査者が必ずしもその分野に精通しているとは限らず、全く異なる分野の審査者が関わることも多々あります。そのような場合、有名な出版社から出版されている国際誌に論文が掲載されていれば、その研究の質はある程度保障されていると見てもらえます（実際に質が良いかどうかは場合によりますが）。私の経験では、研究を重視する大学ほど、このような考え方をすることが多いように思われます。そのような大学への就職活動や内部昇進では、有利になるかもしれません。

第 3 に、たとえ採択に至らなくとも、査読の過程で、最新の研究動向に基づいたコメントが一流の研究者からもらえ、論文や研究の質をよりよくできます。各分野の専門家から詳細なコメントがもらえる機会は貴重ですから、国際誌に投稿する利点は大きいです。

2. 掲載までの流れ

2.1 投稿先ジャーナルを選ぶ

日常的に読んでいるジャーナルなどから、投稿先は自然に決まることが多いように思います。その他の選び方を2つ述べます。第1に、投稿先を決めずに論文の構想を練り、先行研究のレビュー（literature review）に含める論文を列挙し、最も多くの論文を含んでいるジャーナルを投稿先とする方法です。例えば、先行研究のレビューに含んだ論文の多くが *Language Learning* に掲載されていれば、*Language Learning* を投稿先にするのがよいかもかもしれません。

第2に、どのような読者層を対象にしたジャーナルかを確認する方法です。具体的には、可能性のあるジャーナルについて、その目的や投稿ガイドラインを熟読します。例えば、*Language Learning* の目的は、Aims and Scope に以下のように書かれています（<http://www.blackwellpublishing.com/aims.asp?ref=0023-8333&site=1> より）。

Language Learning is a scientific journal dedicated to the understanding of language learning broadly defined. It publishes research articles that systematically apply methods of inquiry from disciplines including psychology, linguistics, cognitive science, educational inquiry, neuroscience, ethnography, sociolinguistics, sociology, and anthropology. It is concerned with fundamental theoretical issues in language learning such as child, second, and foreign language acquisition, language education, bilingualism, literacy, language representation in mind and brain, culture, cognition, pragmatics, and intergroup relations...

投稿ガイドラインは Author Guidelines 中の Instructions for Contributors に以下のように書かれています（<http://www.wiley.com/bw/submit.asp?ref=0023-8333> より）。

Language Learning is an international journal that publishes rigorous, original empirical research as well as systematic critical literature reviews and innovative methodological contributions. Domains covered include first and second language acquisition in naturalistic as well as tutored contexts, including second, foreign, and heritage language, bilingual education, immersion programs, and study abroad. All disciplinary perspectives are welcome, from linguistics and psychology to education, anthropology, sociology, cognitive or the neurosciences.

As one of the premier peer-reviewed journals in the field of applied linguistics, established in 1948 at the University of Michigan, Language Learning strives to promote research of the highest quality, from thorough literature reviews and solid theoretical frameworks to rigorous data analysis, cogent argumentation and clear presentation.

このようにジャーナルが求める論文についての情報を複数入手し、読み比べ、投稿先を決めていきます。ジャーナルの著名度や制限語数などの関連情報だけに振り回されないことが大切です。また、ジャーナルにどんなセクションがあるかも確認し、そのジャーナルのどのセクションに投稿したいかも同時に考えます。例えば、*TESOL Quarterly* には、7つのセクションがあります：Full-Length Articles, Forum, Brief Reports and Summaries, Teaching Issues, Research Issues, Research Digest, and Book Reviews。以前書いた、メタ分析の方法論に関するレビュー論文は Forum に載せていただきました。投稿先を考える際には、方法論のレビュー論文を受け入れてくれそうなジャーナルを複数検討し、その中で *TESOL Quarterly* の Forum が適切ではないかと共著者と相談し、決定しました。

また、AAAL (American Association of Applied Linguistics) の年次大会では、主要ジャーナルの編集者を招き、聴衆からの質問に答えるというセッションがあります。そのようなセッションに参加し、投稿ガイドラインに書かれていない情報を入手することも有意義だと思います。なお、AAAL 2010 で行われたこのセッションをまとめた記事が、*Modern Language Journal*, 94, 636-664 (Winter 2010) に掲載されています。10 のジャーナルの編集者がコメントしており、各ジャーナルが対象とする読者層などが書かれています。

2.2 投稿先ジャーナルの読者層を考えて論文執筆

投稿先がある程度決まった後は、論文の執筆を始めます。投稿先ジャーナルの読者であれば、ほとんどの方が読んで分かるくらいを目安にして書きましょう。言い換えると、あまりに専門的に書きすぎると、大多数の読者には内容が伝わらなくなってしまい、不採択の原因になります。特に、データ分析手法などは全ての読者が熟知しているわけではありませんから、丁寧に書きましょう。投稿先のジャーナルに掲載されている論文を目安にして書くと、簡潔に分かり易く書くことができると思います。執筆時には、執筆だけに専念するのではなく、該当分野に加え、少し異なる分野の論文も読むことを心がけておくと、自分の論文を客観的に見ることができ、内容の取捨選択や表現の工夫ができるようになります。

また、論文で使用する英語については、適切な文法・単語を使い、読み易く書くことが重要です。ただ、いくら英語力を伸ばす努力を日常的にしたとしても、英語を母語としない研究者が英語論文を執筆する際には、英語の面で限界があります。そのため英語母語話者に校正を依頼することになりますが、国際誌に投稿するならば、プロの英文校閲業者を使う方がよいと思います。英語の質が悪いと、中身を真剣に読んでももらえないことが多いからです。私のお勧めしたい英文校閲業者は、Editage (<http://www.editage.jp/>) です。私は今までに 6 つの業者で校閲を受けましたが、Editage が最も自分に合っていると思います。3 年間依頼しています。Editage では、文法・単語の校正に加え、投稿先のジャーナルに書式が一致しているかを校閲してくれます。私は論文・学会発表 abstract など含め、過去 3 年で Editage

に 23 回の校閲を受けました。ほぼ全ての場合において校閲は非常に満足のいく水準でした。指定返信時刻は厳守され、早く返信されることはあっても遅くなることは一度もありませんでした。また英語が正しいかどうかだけでなく、論文で使われるより良い表現を提案してくれます。Editage の他に評判のよいのは、EditAvenue (<http://www.editavenue.com/>) です。私自身はお願いしたことは無いのですが、私が尊敬する国際的に活躍している先生から教えていただきました。自分のスタイルに合う英文校閲業者を探すために、複数の業者に依頼する方法もあるでしょう。

さらには、共著でないならば特に、他の研究者に読んでもらい客観的なコメントをもらうことが大切です。可能であれば、投稿前の論文を有識者、特に（投稿先の）国際誌に掲載したり、査読を行ったりした経験がある研究者に見てもらいましょう。できれば、研究のテーマを決める時点、ある程度論文の構想がまとまった時点などにも意見をもらい、論文に反映させたいものです。ただ、そのように恵まれた機会は非常に限られます。より現実的に可能であるのは、当該分野をテーマとする博士課程の学生や若い研究者などに意見を求めることだと思います。お互いに建設的に批判しあえる仲間を持つておくと、今後の大きな財産になります。

なお悩ましい点は、規定字数をどの程度厳守すべきかです。原則的には字数を厳守しますが、様々な事情により字数を越えてしまうこともあると思います。*Language Testing* は出版社が Sage に移って以来、規定字数の 8000 語がかなり厳守されるようになりました。*System* は初回の投稿時には 5000 語ですが、私が再投稿した際には厳しい字数制限はありませんでした。規定字数をどの程度厳密に守るべきかについては、ジャーナルに載った論文の字数を数えたり、論文を掲載した研究者に尋ねたり、編集者に問い合わせたりするのが良いかもしれません。

2.3 投稿する

論文が完成したら、投稿します。カバーレターをつけ、自分の論文の特徴や Editor にアピールしたい点を書きます。例えば、私達が *TESOL Quarterly* に投稿したときは、以下のカバーレターをつけました。

September 26, 2008

Professor A. Suresh Canagarajah
Editor, TESOL Quarterly
Pennsylvania State University
305 Sparks Building
University Park, PA 16802

Dear Professor A. Suresh Canagarajah:

We would like to submit our manuscript entitled “Database selection guidelines for meta-analysis in applied linguistics” to the Forum section of *TESOL Quarterly*. Although meta-analysis is an important research method for quantitatively synthesizing relevant empirical studies (as seen in studies by Norris and Ortega), procedures for collecting studies differ among researchers. The use of a database is necessary, but the existence of many types of databases makes it difficult to select the appropriate type and combination of databases. We have attempted to solve this issue. Our manuscript reflects our experience in conducting meta-analysis for our previous paper, which is in press for the journal *Language Testing*. We believe that our manuscript makes a unique contribution to the field of TESOL and is of interest to the readers of *TESOL Quarterly*. We would greatly appreciate it if you could acknowledge receipt of our manuscript. We look forward to hearing from you.

Sincerely,

Yo In'nami, Ph.D.
Department of Humanities, Management Science, and Engineering,
Toyohashi University of Technology, 1-1 Hibarigaoka, Tempaku,
Toyohashi, Aichi 441-8580, Japan
Phone: +81-532-44-6960
Email: innami@hse.tut.ac.jp

多くのジャーナルでは、投稿後 3 ヶ月前後で査読結果が返送されてきます。査読結果は、段階制で評価されることが多いです。例えば、*Language Testing* では、accept, accept with minor revision, revise and resubmit, reject の 4 段階で評価されます。多くの場合において、revise and resubmit と判断されることが多いように思います。なお、査読結果に段階を設けていないジャーナル (*International Journal of Testing, System* など) もあります。

2.4 査読者からのコメントに答える

一般的に掲載の難しいジャーナルでは、2-3名の査読者から多くのコメントが返信されます。論文の全体的な講評、major comments, minor comments に分けて書かれていることが多いです。特に初めて投稿するときには、厳しいコメントにショックを受けることが多いと思います。これはベテランの研究者でも同様であり、私が尊敬する国際的に活躍しているある研究者は、あまりにショックを受けたので、その後半年間は論文の修正に手がつけられなかったそうです。しかし逆に言うと、コメントが多ければ多いほど、そして厳しければ厳しいほど、論文を真剣に読んでくれた証拠です。それほど熱心に論文に対してコメントをくれるのは、査読者以外にはいないと思います。そう考えると、査読者からのコメントは大変ありがたいものです。

各コメントに丁寧に応じます。コメント 1 つ 1 つに対し、どのように対応したかを別ファイルにまとめて提出します。査読者は該当分野の第一人者のことが多いですから、コメントはできるだけ取り入れましょう。査読者が明らかに誤解しているなど、コメントを取り入れることが難しいときには、その旨を丁寧に書きましょう。ただ、その場合でも、査読者の誤解を減らすように書き直すなど、何らかの前向きな修正を試みたいものです。さらには、コメントが論文の一部に対してだったとしても、論文全体を見直し、該当する箇所は全て修正するという真摯な態度も必要です。

論文を修正し、再投稿します。通常、再投稿には期限はありませんが、明確な期限を設け、それ以降に再投稿する際には新たな投稿とみなすジャーナルもあります (*Language Assessment Quarterly*)。

再投稿された論文は 2 度目の査読を受けます。1 度目と同じ査読者が見る場合もありますが (*Language Testing, System*)、異なる査読者が読むこともある (*Language Learning*) ようです。編集者を通じ、2-3 回くらいのやりとりが続くのが普通だと思います。なお、2 度目以降の査読では、査読者の手元には「修正後の論文」と「1 度目の査読のコメントに基づき投稿者がどのように対応したかを詳細に記した書類」の両方があるのが普通ですが、再査読の際に全ての査読者が後者の書類に目を通すとは限りません。それでもきちんと読み修正点を確認しながら評価する査読者はいますので、論文を丁寧に修正し、コメントに対する修正書類には修正方法を明示して返すべきです。

しかし、重要なコメントであるにも関わらず、どうしても論文に取り入れられない場合があります。そのような場合には、再投稿をあきらめ、他のジャーナルへの投稿を目指すこともできます。その場合でも、コメントで取り入れられる部分はできるだけ取り入れ、論文を修正してから投稿すべきでしょう。上述した AAAL 2010 のセッションで学んだことですが、応用言語学・英語教育は狭い分野のため、他のジャーナルに再投稿したとしても、同じ査読者に当たる可能性もあります。修正することなく、全く同じ論文が投稿されると、査読者にとっても悪い印象を与えます。

また、1 つの論文を複数のジャーナルに同時期に投稿することは絶対にしてはいけません。そのジャーナルに投稿禁止になるなどのペナルティが与えられる場合もあります。また、研究者としての評判も悪くなります。そのような印象を持たれることを避けるために、内容が類似した複数の論文を投稿する際には、それぞれの独自性を明確に述べ、同じ内容でないことが明確に分かるようにしておきましょう。

2.5 採択決定後

採択が決まると、後は出版社とのやり取りです。まず、**copyright form** に署名します。その後、出版社から **galley proof** が送られてきます。上付文字、下付文字、イタリックなどが的確に反映されているか注意しましょう。**galley proof** の確認は 1 度のみ出版社が多いように思います。そのため、出版社をある程度信頼する必要があります、場合によっては上付文字、下付文字、イタリックなどが一部未修正のまま出版されることもあります（こういった事情を知ると、論文の誤植に寛容になれます）。またジャーナルによっては、APA 方式を採用していても **M** や **SD** をイタリックにしないなどの独自ルールを設けていますので、厳密な修正は要求しない方がよいかもしれません。これらの書類は、48 時間以内の返送を求める出版社もあります。メールは頻繁に確認し、見逃さないように注意しましょう。

出版後は、出版社から掲載論文の pdf ファイルが送られてきます。出版社によっては、掲載論文を含むジャーナルも送ってくれます。なお、私の経験では、初投稿から採択まで最短 4 ヶ月（+出版まで 4 ヶ月）、最長 18 ヶ月（+出版まで 2 ヶ月）かかりました。参考までに、以下の表にまとめました。

初投稿	審査結果通知	再投稿	採択決定	出版社とのやり取り	掲載
2004年5月 (<i>Language Testing</i>)	9月 (Revise and resubmit。修正し、 <i>System</i> へ投稿)				
2005年8月 (<i>System</i>)	11月	2006年4月	4月	7月	9月
2007年5月 (<i>Language Testing</i>)	9月	2008年2月	5月	2009年1月	3月
2008年9月 (<i>TESOL Quarterly</i>)	2009年3月	5月	9月	2010年1月	4月
2009年3月 (<i>Language Learning</i>)	6月	2010年11月	12月(不採択、修正し、他ジャーナルへ投稿予定)		
2009年8月 (<i>Language Testing</i>)	9月(不採択。修正し、 <i>International Journal of Testing</i> へ投稿)				
2009年11月 (<i>International Journal of Testing</i>)	2010年3月	3月	3月	7月	8月
2010年1月 (<i>Language Assessment Quarterly</i>)	7月	10月	2011年2月	未定	5月か6月頃

2.6 その他

Language Testing などの査読を引き受けてわかったことが2点あります。第1に、査読時に最も困る論文は、研究で何を行ったかが不明瞭な論文です。研究の目的・リサーチクエスチョンの両方、もしくはいずれかが明瞭に書かれておらず、論文のその他の箇所を熱心に読もうという気があまりおきません。第2に、規定字数に比べ大幅に短い論文は、本来ならば含めるべき情報を欠いている場合が多く、論文を真剣に書いたかを疑ってしまうということです。そのような論文は、結果として評価が下がると思います。

3. 掲載のコツ

当該分野の国際誌に1度でも掲載されると、自信がつかます。掲載のコツを3点述べます。第1に、すでに掲載されている論文と類似したテーマを選ぶことです。掲載されている論文は、論文の質がある程度保障されていることに加え、掲載ジャーナルの読者層の興味に一致しています。したがって、すでに掲載されている論文と類似したテーマを選ぶと採択されやすくなります。お勧めなのは、掲載論文のレプリケーション (replication) を行うことです。掲載論文と可能な限り条件を同じにしてレプリケーションを行う、条件を一部変えてレプリケーションを行うなどの方法があります。一部を変えてレプリケーションを行う例としては、掲載論文とは異なる L1/L2 の学習者を対象とする、テスト形式を増やす・変える、横断的 (cross-sectional) ではなく縦断的 (longitudinal) なデザインを使う、などがあります。このように書くとオリジナリティが無い様に思うかもしれませんが、あらゆる研究は多かれ少なかれ先行研究のレプリケーションです。また、1度のみの研究で確固とした結論が得られることはまずありません。そのため、類似したテーマを選び、レプリケーションを積極的に行うことは望ましいと思われれます。ただ、レプリケーション研究をあまり評価しない査読者がいることも事実です。*Language Teaching, Studies in Second Language Acquisition* のように、レプリケーションの論文を積極的に採用することを明示しているジャーナルを選ぶことは安全策になります。

第2に、当該分野のレビュー論文を書くことです。研究数が増えるにつれて、当該分野を分かり易くまとめたレビュー論文は貴重になります。しかし、レビュー論文を書くには、当該分野について精通し、執筆のための十分な時間があることが必要で、執筆は容易ではありません。そのため、全投稿論文の中でレビュー論文は少なく、出版されると重要視される傾向が強いです。特に、レビュー論文執筆の際には、メタ分析を用いることをお勧めします。メタ分析は、関連する研究を系統的に集め、その知見を統計的に統合する分析方法です。具体的には、各研究から平均値などの情報を抽出し、平均値の平均・標準偏差などを求めます。博士論文を書く際には先行研究を包括的にレビューすることが多いと思われるので、データベース検索などで収集漏れが無いことを確認した後にメタ分析を行うと、非常に有意義なレビュー論文になると思います。大量の論文検索・収集・データ分析は必要になりますが、当該分野を包括的に知りたいのであればメタ分析を用いたレビュー論文の執筆をお勧めします。私はこのような作業が好きで、*System* を除く4本の論文は全てメタ分析 (もしくはメタ分析的な概念) を用いたレビュー論文です。

第3に、単著ではなく、共著で論文を書くことです。利点は3つあります。第1に、査読者の厳しいコメントに、客観的・冷静に対処できます。私の経験では、筆頭著者として論文を書いたときには論文への思い入れも強く、厳しいコメントはなかなか受け入れることができません。しかし、共著者にとってはやや冷静に見られる面もあるようで、査読者のコメントを適切に取り入れ修正できるようです。第2の利点は、論文の執筆を分担できる

ことです。論文の全セクションを同じようにうまく書けることが理想ですが、誰にも得意ではない部分があるのではないかと思います。例えば、私はデータ解釈を分かり易く書くことが苦手です。専門的に書きすぎる傾向があるようです。そのため、その箇所の執筆は共著者に大きく助けられています。ただ、共著論文を書く時には、研究自体や執筆を始める前に、著者名の順番、corresponding author の権利などは著者同士で十分に話し合うことが必要です。第 3 の利点は、論文執筆・投稿のペースを早められることです。国際誌の投稿には、原則締め切りがないため、365 日いつでも投稿できます。これは利点でもあります。締め切りに向けて仕事を進めるのが好きな人には欠点にもなるようです。もし共著者がいると、連絡を取り合いながら迷惑をかけないように進めなくてはならないという心理から、単独で執筆する時よりも早く仕事が進められると思います。国際誌に何度も載せている私の友人は、単独の研究では締め切りの 1 週間前完成を目指すが、共著の場合には 2 週間前には完成させるつもりで執筆すると言っています。

最後に、論文の内容によっては、日本の中・高等学校の英語教員に読んでもらいたい場合もあるでしょう。その際は、日本国内で発行されているジャーナルへの投稿が適切です。したがって、論文の内容や読者層を考慮したうえで、投稿先を考えることになります。また、Klingner, Scanlon, and Pressley (2005) では、投稿先が国際誌・国内誌に関わらず、論文を出版する際に役立つ助言が数多く紹介されています。

私も研究を始めたころは、国際誌にあこがれはあるものの、どのような手順を踏んで国際誌に投稿したらよいか分からず、国際誌が遠い存在に思えた時期もありました。しかし、国内外の学会で知り合った方に少しずつ教えていただきながら、自分でも分からないなりに挑戦し続けてここまで進んできたように思います。本稿が、これから国際誌に投稿したいと思っている方への一助になれば本望です。

謝辞

本稿の執筆段階で、小泉利恵氏（常磐大学）から多くの有意義なコメントをいただきました。改めて感謝いたします。

参考文献

Klingner, J. K., Scanlon, D., & Pressley, M. (2005). How to publish in scholarly journals. *Educational Researcher*, 34(8), 14–20.